

セント・ジョン・アーヴィンの演劇研究(1) —— 初期6作品を中心に

河野賢司

(I) 著者の経歴

セント・ジョン・アーヴィン (St. John Ervine, 1883-1971) は1883年12月28日、ベルファースト東郊外の労働者階級居住区バリーマキャレット (Ballymacarret) に、本名ジョン・グリア・アーヴィン (John Greer Irvine [sic]) として生まれた。父ウィリアム (William) ・アーヴィン、母セアラ (Sarah) ・グリアはともに聾啞者 (deaf mutes) で、父はジョンが3歳になる前に亡くなり、アルバートブリッジ・ロード (Albertbridge Road) で金物店を営む母方の祖母マーガレット (Margaret Greer) の家で子ども時代の大半を過ごしたジョンは、祖母に深い愛着を抱いていた。しかし、この祖母もジョンが10歳のときに亡くなり、母親はジョンと妹の二子を抱え、女手ひとつで生計を立てるのに苦労したらしい。転校を繰り返した5つの小学校はジョンの気に入らなかったようだが、名校長マシュー・マクレランド (Matthew McClelland) のウェストボーン校 (市内ニュタウナーズ・ロード) の学校生活には馴染んだようだ。母子家庭の貧困のせいでそれ以上の高等教育は受けられず、17歳 (15歳という記述もある) で市内の保険会社に勤務し、その後ロンドンの保険会社に転職している。ロンドンではショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) を崇拝する気持ちからフェビアン協会に入り、新聞投稿や劇作の執筆活動を始め、この頃から自分の名前に「セント」を冠するようになる¹⁾。処女作の1幕劇『寛大な恋人』 (*The Magnanimous Lover*) がイエイツの目にとまり、初の本格劇『混信婚』 (*Mixed Marriage*) がレノックス・ロビンソン (Lennox Robinson, 1886-1958) 演出で1911年に上演される僥倖に恵まれる。27歳のこの年にリアノーラ・メアリー・デイヴィス (Leonora Mary Davis) と結婚。初期戯曲集にみえる献辞「ノラに」 (to Nora) はこのリアノーラのことと思われる。彼女もまた「フェビアン改革委員会」のメンバーで、ビアトリス (Beatrice Potter Webb, 1858-1943) やシドニー・ウェブ (Sidney James Webb, 1859-1947) らのフェビアン自由主義に対抗する立場を取っていた。ジョンも妻も穏健派の社会民主主義者を標榜しており、ジョンの保守的な政治姿勢はこの時期に醸成されたものと考えられる。このころ、フレデリック・オズボーンと共同で『フェビアン・ナースリ

ング（秘蔵っ子）』なるタイプ印刷雑誌を編集し、反・自由主義の見解を提起している。

1915年10月末に彼は、財政難に陥っていたダブリンのアビー劇場再建のために支配人に任命される。レノックス・ロビンソンの解任後、俳優ウィルソン（A. Patrick Wilson）が支配人に就任していたが、巨額の赤字計上は止められず、ウィルソン更迭はやむを得ない措置で、アーヴィンの手腕に期待がかかった。しかし、アーヴィンが示したアビー劇場経営方針は従来のものとは比べて極めて異質だった。「農民劇」に代表されるアイルランド国民意識の発揚路線を切り捨て、旧約聖書に取材したミルトン（John Milton, 1608-74）の『闘志サムソン』（*Samson Agonistes*, 1671）やボーモント（Francis Beaumont, 1584-1616）とフレッチャー（John Fletcher, 1579-1625）合作の英国初のパロディ劇『燃える杵の騎士』（*The Knight of the Burning Pestle*, 1607/9）などの古典劇上演の意向を明白に打ち出すなど、アイルランド色排除の方針が顕著だった。（実際には、彼の就任期間中に上演された4戯曲にはこれらは含まれていないが。）また、劇作家たちに劇作の手法を教育したり、〈アルスター式鍛練〉（Ulster discipline）と称して、巡回公演中の役者に1日2回のリハーサルを要求し、このスパルタ訓練を拒否する役者には1週間後の解雇通知を言い渡す厳しい処遇で臨んだ。事実、多くの優れた役者がこれに猛反発して退団し、アーサー・シンクレア（Arthur Sinclair）率いる「アイリッシュ・プレイヤーズ」（The Irish Players）という巡回劇団をみずから結成し、のちに海外公演も活発に行なってアビー劇場に対抗することになる（ただし、「アイリッシュ・プレイヤーズ」の劇団員からは劇作家は誕生せず、彼らは役者集団としてのみの活動に終わる）。

1916年1月のダブリン文芸協会の講演でアーヴィンは、アイルランドは単に「病める国」であるばかりか「ほとんど狂った国」と形容し、この年の4月に勃発した復活祭蜂起を「英国と西洋文明に対するこのうえない裏切り」であるとまで述べ、自治反対のユニオニストの強硬姿勢をあらわにした。アビー劇場の俳優たちの中には蜂起を支援した者もあり、蜂起の指導者ピアスやマクドナにとってアビー劇場の芝居は精神的支柱の側面もあったのだが、5月16日の新聞にはアビー劇場の売却広告が掲載され、人々を驚かせた。ピアスらを射殺したマクスウェル将軍（General Sir John Maxwell）を大胆にもアビー劇場に招待したことも反感を煽り、5月29日、アーヴィンのもとでの出演拒否のビラが劇団員によって撒かれ、多くの俳優がアビー劇場を去っていった。

その結果、就任後9か月しかたためぬ1916年7月、彼は劇場支配人職の辞表を提出し、イエイツやグレゴリー夫人をある意味では安堵させた。後任にはキョー（Augustus Keogh）が就いた。こんにちから振り返れば、アビー劇場史のなかで、まったくもっ

て異端の専制君主的な支配人だった事実に驚かされる。劇評家ホロウェイ (Joseph Holloway, 1861-1944) はアーヴィンについて、「北アイルランド人が才能と厚かましさを兼ね備えたなら、はなもちならない」と言及し、またキャヴァナは『アビー劇場物語』のなかで、この「狂信的な英国人びいき」(rabid pro-Englishman) は有名人ではあったが、「みんなから嫌われていた」と記している²⁾。

ダブリンを去ったアーヴィンはイギリス陸軍に入隊し、1918年ロイヤル・ダブリン・フュージャリア連隊中尉として従軍したフランスで重傷を負い、片脚切断を余儀なくされた。この痛みは終生彼につきまとったが、毅然として耐え抜いた。1913年初演の『ジェイン・クレグ』(*Jane Clegg*) には、「片足をなくした男は、雨が降りそうなときには付け根が痺れるように疼いて予知できる」という意味の台詞³⁾があるが、なにか予兆的な一節である。戦後は英国のデヴォンに定住して「モーニング・ポスト」や「オブザーヴァー」紙の劇評家として活躍し、1929年にはニュー・ヨークの「ワールド」紙にも寄稿し、アメリカ演劇への辛口の批評で反響を呼んだ。

第1次大戦後の1920年代はロンドンのウェスト・エンドの商業劇場向けの喜劇、『メアリー、メアリー、すこぶるつむじまがり』(*Mary, Mary, Quite Contrary*, 1923) や『アンソニーとアナ』(*Anthony and Anna*, 1925)、離婚して元の妻と再婚する男を描いた『最初のフレイザー夫人』(*The First Mrs. Fraser*, 1929) を発表した。その後アルスターを主題とする作品に回帰し、1936年には祖母マーガレットの店の思い出に基づく人気作『ボイドの店』(*Boyd's Shop*)、1941年には故郷を感傷的に描いた『友人たちと親戚たち』(*Friends and Relatives*) が上演された。戯曲の他にも、多くの小説や伝記、回顧録を執筆し、ベルファーストで過ごした少年時代の思い出や他の文学者たちとの交流、演劇論を綴っている。伝記では、彼が崇拜したショーの伝記(1956年)や政治家パーネル伝(1925年)が有名だが、前者の5年前に書かれた批判的なワイルド伝(1951年)は、およそピューリタンの彼が執筆するには不向きな題材であった。さらに、救世軍(Salvation Army)を創始した英国牧師ブース(William Booth, 1829-1912)を『神の兵士』(*God's Soldier*, 1934)で扱っている。

1916年以降、英国本土での生活期間が長かった彼だが、イエイツが1932年に創設した「アイルランド文学アカデミー」の当初の会員でもあり、ベルファーストのクイーンズ大学からは名誉博士号を授与されており、1933年から36年には王立文学協会(Royal Society of Literature)の演劇担当教授も務めている。81歳の1965年に妻に先立たれ、「蜜の溝」と名づけたデヴォン州シートン(Seaton)の屋敷は老齢の一人住まいには侘しくなって売却。子宝に恵まれなかったこともあって、晩年は親友ニューマン夫妻のサセックス州チチェスターの家で、のちには老人ホームで、この夫妻の介

護を受けながら、1971年1月24日、87歳で逝去した。アーヴィンの未完の自伝原稿はこのマーク・ニューマン氏の手元にあるとされ、多彩な業績を残した豊饒な作家であるにも関わらず、なぜだか決定版とよびうるような本格的な研究書は英米でも刊行されていないし、わが国での研究論文⁴⁾も僅かである。

(II) 経歴の3つの段階

『アーヴィン戯曲選集』の編者クローニンの序文⁵⁾によれば、アーヴィンの戯曲は概ね以下のような3つの段階に分類することができるという。

[1] 初期作品 (アビー劇場時代)	1911年から1915年
[2] 中期作品 (ロンドン・ウェスト・エンド喜劇時代)	1920年代
[3] 後期作品 (アルスター主題への回帰)	1930年代から1940年代

[1] 初期作品 (アビー劇場時代) 概観

この時期に書かれた作品は以下の通り。一幕物2編とフル・レンクス4編。

『混信婚』(*Mixed Marriage*, 1911年3月30日初演)

『寛大な恋人』(*The Magnanimous Lover*, 1912年10月17日初演)

『ジェイン・クレグ』(*Jane Clegg*, 1913年4月21日初演)

『批評家』(*The Critics*, 1913年11月20日初演)

『オレンジマン』(*The Orangeman*, 不詳・アイルランドでは1914年3月21日)

『ジョン・ファーガソン』(*John Ferguson*, 1915年11月30日初演)

(III) 初期6作品の梗概と論評

以下、初演の早い順に作品の概要を詳しく紹介し、論評を付記する。

①『混信婚』(*Mixed Marriage*) (4幕)

初演は1911年3月30日、ダブリンのアビー劇場。レノックス・ロビンソンが演出。最近では1999年5月18日にベルファーストのグループ劇場においてセンター・ステイジ劇団(演出コリン・カーネギー)によって上演されている。

舞台設定は1900年代(1900年から1909年)のベルファーストのフォールズ・ロード[カトリック居住区]とシャンキル・ロード[プロテスタント居住区]の間の労働者階級のレイニー家の台所。

第1幕。7月初めの暖かい夕刻のレイニー家。居間でレイニー夫人が夕食の支度中、夫のジョン・レイニー (John Rainey) が仕事から帰宅する。夕刊の配達を待ちわびる彼は、近々決起予定のストライキ報道を知りたがっている。夕刊が届き、二男のトム (Tom) も帰宅。兄のヒュー (Hugh) はカトリックの友人マイケル (Michael O'Hara) とシン・フェイン会館 (Sinn Feiners' Hall) に寄っていて帰りが遅れると告げると、7月12日のプロテスタントの祝日にはカトリックの暴動を恐れて警官隊が治安出動する始末だし、マイケルは独立労働党 (I.L.P.: Independent Labor Party) 員、つまりは社会主義者であると、ジョンは不快感を示す。夫人は、オレンジ会員や『テレグラフ』紙が挑発しているせいだ、と弁護するが、1690年7月1日はボインの戦いでオレンジ公ウィリアムがアイルランドからカトリックを追い出した誇るべき日であり、もしこの戦いに敗北していたらアイルランドのプロテスタントは殲滅させられていただろう、とジョンは反論。そこへ、美しくて知的な24歳の娘ノラ・マリー (Nora Murray) がヒューに会いに訪ねてくる。お茶をすすめてもしきりに遠慮するノラを、夫人はヒューを迎えに外へ連れ出す。名前からノラがカトリックと推測したジョンは、ヒューが彼女と交際することに反対。やがてヒューがマイケルと母親、ノラとともに帰宅。マイケルはジョンに、新旧両派から信望の篤いジョンに労働者の結束を固める指導者としての役割を要請する。ストの指導者たちの大半がカトリックで自治賛成派であることを根拠に『テレグラフ』紙はスト反対の論陣を張っているが、宗派は違えども共通の目的に向かって協力することが大事だとマイケルは主張し、時給1ペニー以上の賃金を要求する当然のストライキを企てているジョンも、これには一定の理解を示す。食事の後片付けに向かう夫人にノラが手伝いを申し出て、二人は退出。ストライキ決起集会の開催予定場が聖マリア・ホール (St. Mary Hall) と聞いて参加に難色を示すジョンにマイケルは会場変更を提案し、カトリックでもプロテスタントでも同じ人間として衣食住が必要なことに変わりはなく、宗派による賃金格差もない以上、同じような苦痛を両者ともに味わっている、とヒューは訴え、宗派間の不和を巧みに利用して賃金を不当に低くおさえている雇用者側に一致団結して対応すべきだと、マイケルも父に説得する。病気も飢えもない素晴らしいアイルランドの国づくりに両派が協調して尽力し、かつて〈聖人の島〉と呼ばれた理想郷の再現をマイケルは訴えるが、ジョンは飽くまでも、カトリックとプロテスタントは違うのだと譲らない。洗い物を終えて戻ってきても論争がまだ続いているのに驚くノラに、口論している間は安泰だから、と夫人は達観する。

第2幕。1週間後の同じ場所。夫人がパンを焼いていると、長男ヒューが帰宅。父親ジョンが先日行なった、頑迷固陋を葬り去ろうという趣旨の名演説を褒め、搾取する雇用者側をヒューが非難すると、人間はそう簡単に変わるものでなく、裕福な雇用者なりに悩みはあるのだから、と夫人は諫める。配膳の手伝いをしながらなにごとか切り出しかねている様子のヒューは、ノラとの結婚の意思をついに打ち明ける。ノラより若い年齢で結婚し、ヒューたちを手塩にかけて育ててきた夫人はこれに感じ入るが、夫の反応がやはり気掛かり。結婚しても互いに宗旨をかえることはせず、生まれてくる子どもには自らの意思で宗旨を選択させたい、先祖代々の宗派をそのまま受け継ぐのではなく、宗派を自ら選ぶ時代が来ることを願う、とヒューが訴えると、実際に子どもができるそれはなかなか難しい問題だ、と母親。母さんがいなければとっくにこの家を出ていただろう、とヒュー。やがてマイケルが訪ねて来て、市内で昨夜揉め事があり、今夜のオレンジ会の集会でハート (Hart) という弁護士が反カトリックのアジ演説をするという不穏な動きへの警戒を呼びかける。留守のジョンを探しにトムが使いに出される。ヒューの結婚告白を聞いた夫人は、このことが夫の逆鱗に触れる恐れがあるから、ストライキが終わるまでは内密にしておくほうがよい、と助言。ノラが来て、カトリックである身を詫げるが、宗派が同じであるよりも料理上手なことの方が妻としては大事、と夫人は安心させる。男たちは自分が偉いと思っている、手のかかる大きな子どもにすぎない、と語り、ノラもそれ

には同感だと応える。やがてトムが父親を連れて帰宅。庭に出ていたマイケル、ヒュー、ノラも戻る。遠慮して暇乞いをするノラをヒューが送りに出る。トムは不承不承、また使いに出される。マイケルはオレンジ会の集会に来るハートの話を持ち出し、せっかく前回の演説で宗派を越えた団結の成果があがったのだから、もう一度集会で演説してジョンの影響力の強さを見せてほしい、と懇願すると、レイニーはあっさりと同意する。喜んだ夫人は夫の靴を脱がせるサービスをし、マイケルも食事の配膳を手伝う。

第3幕。翌日の遅い午後。夫人が靴下の繕い物をしていると、夫が帰宅。この日すでに2度も演説を行ない、今晚はいよいよオレンジ会の支部^{ロツジ}集会所で〈反・ハート〉の演説をするので、蝶ネクタイ(dickey)の準備をさせる。息子ヒューがノラと交際している事実を気にするが、付き合っている娘みんなと結婚しないといけないなら、一夫多妻が許されているモルモン教徒だわ、と夫人。結婚は厳粛なもので慎重に相手を選ばねばならない、とジョン。カトリック客を家に迎え、息子の交際をなけば黙認している自分は決して頑迷な男ではないし、お互いの不幸を種にいがみあい戦いあっている世の中こそ不条理であり、自分は正しい道を進む、と言いつつ、彼は着替えに階上へ上がる。トムが慌てて帰宅し、マイケルが頭を負傷したと告げる。カトリック誹謗の歌を歌っていた連中を諷めたところ、酔っ払いの一人からベルトで殴られて出血していると言う。夫人はトムに医者呼びに行かせ、マイケルのいる場所へ向かう。誰もいなくなった台所にヒューとノラが帰宅。家に誰もいないものと思ひ込んだ二人は将来のことを話し合い、ノラは次第に熱を帯びて、アイルランドなんかどうなってもヒューと一緒にいたい、と激しく抱擁する。このとき、階上の寝室のドアが開き、階段の上にジョンが正装で登場、二人の話し声が耳に入る。君と結婚できれば僕は英国国王や市長よりも果報者だ、とヒューが熱いキスを交わすや、ジョンが「なんだと？」と降りてきて、二人は慌てて離れる。二人の結婚の意思が堅く、またノラが改宗するつもりもないと知ったジョンは激怒。ヒューは父の躰は体罰であり、母親がいなければとっくに家出していた、とやり返す。ジョンは息子に家から出ていくように言い渡し、ヒューはこれを受け入れる。そこへ負傷したマイケルを連れて夫人とトムが帰宅。ジョンは、カトリックはこの家の敷居を跨ぐな、とマイケルを指さし、ヒューとノラの結婚話への反対を伝えるが、宗派の違いなどは大事でない、この家は自分のものでもあり、自分の許可なしに息子を追い出すことはできない、と夫人は反論し、マイケルを介抱する。カトリック主導ストの〈スト破り〉を扇動するハートの策動に対抗できるのはジョンだけだ、とマイケルは訴えるが、約束していたオレンジ会館での演説をレイニーは拒否する。政治的大義を重んじるマイケルは、個人的な幸福よりもアイルランド問題の方が重要だからと、ヒューとの結婚を断念するようノラに対して迫る。夫人はノラたちを弁護し、平和を守るために演説に行くように夫に促すが、議論は、〈婚約破棄〉か〈演説中止〉かをめぐって、堂々巡りの平行線を続ける。調停役の夫人が議論をまとめ、ジョンが絶対に演説に行かない意思を確認すると、マイケルは混乱してもはや次善策が浮かばない、と言う。話せば分かって貰えるかもしれないからと、父親の代わりに今夜、自分が演台に立つ、とヒューが宣言すると、それなら事の顛末を自分があらいざらい説明してやる、とジョンは会館へ単身出かけて行く。ヒューとノラ、トムはこの家を去る決意を語り、夫人は辛い仕事だけでも耐えて頑張るようにみんなを元気づける。厄介な世の中だこと、と漏らして、夫人は靴下の繕い物をふたたび続ける。

第4幕。10日後。窓の庇が下ろされ、ドアが堅く閉められている。戸外では「カトリックを出せ」と(プロテスタントの)人々の怒鳴り声とドアへの投石が続く。台所には夫人とノラ。ジョンは無言で歩き回っている。結婚を控えたヒューとノラが挨拶に訪れているが、ジョンは取り合わない。ヒューとトムのいる二階にも投石があり、窓ガラスが割られる。警官隊が暴徒たちを警棒で叩き威圧するものの、数が多くて難航している模様。トムは、親友からも無視されるようになり、スコットランド

かイングランドへ移住すると話す。やがて、暴徒たちに向かってカトリックの集団が押し寄せ、マイケルは彼らを必死に止めて両派の全面衝突を防ごうとしているが、はねのけられ、ついには軍隊も動員された、とトムが知らせる。治安判事が「暴動法」の条文を読み上げ、即刻解散せねば発砲する旨の威嚇放送とそれに反抗する暴徒の怒号が戸外から聞こえ、発砲が実際に始まる。最初は上空への威嚇射撃であり、逆にレンガ投石を受けた負傷兵も出る。騒乱に怯えるノラは、婚約撤回のジョンの忠告に従っていればよかった、と後悔し、自分を責める。再び、軍隊の射撃が始まるが、負傷者はいない模様。さらに情勢は悪化し、空砲でなく実弾 (ball cartridge) を使用する旨の警告が発せられる。血まみれになって群衆に解散を呼び掛けているマイケルは、袋叩きにあっているらしい。ヒューはマイケルを助け入れるべく、家のドアを開けて呼びかけ、暴徒たちから野次と投石を浴びる。実弾発射に向けての最後通牒が繰り返され、責任を痛感したノラが思わず通りに飛び出した途端に、一斉射撃が始まり、彼女は撃たれて戸口に倒れる。ヒューが駆け寄るが、ノラはすでに危篤状態。マイケルとヒューが彼女をソファに運ぶ。自分のせいだから撃たれてよかった、とノラ。呆然としながらも、自分は正しかった、とジョン。やさしく夫をたたきながら涙ぐんで、かわいそうな人、と夫人。

作家の生立ちでみたように、幼くして父親を亡くし、祖母のちには母とほぼ女手一つで育てられたアーヴィンの経歴は、彼の劇作品のなかのたくましい女性登場人物に反映されている。レイニー夫人の才気ある受答えの一部を以下の引用に見てみよう。

レイニー その酔っ払いは牢屋に入れにゃならんな。

レイニー夫人 酔っ払ってなくても、もっと悪い事をする連中が大勢いて、その人たちは議会に収まっていますわ。(29)

レイニー夫人 オレンジ会に婦人部があればいいのにねえ。夫に代わって私が出るのに。(42)

レイニー夫人 ねえマイケル、あなたがあたしぐらいの年になればわかるけど、自分に必要なものこそ世の中に必要なものなのよ。ノラとヒューに必要なのは愛情で、世の中に必要なのも愛情。この二人に別れろなんて言うのは間違ってます。分からないの、二人がやろうとしているのは、まさしくあなたがアイルランドにやってほしいことじゃないの？カトリックとプロテスタントが手と手を合わせること。その二人を別れさせようなんて奇妙な話だこと。(40-1)

ときには痛烈な政治批判（国会議員批判）や男ばかりが牛耳る政治結社（オレンジ会）批判を、ときには母親の立場からの人情味あふれる語りかけを行いながらも、毅

然として家庭を守る姿をレイニー夫人は示している。彼女はけっして夫ジョンに従属するのではなく、自らの判断で息子の結婚と独立を応援し、カトリックへの偏見をまったく持たず、夫婦同権を明確に主張する台詞もある。それでいて、戯曲の最期にあるように、頑固な夫を見捨てることをせず、因習にとられる夫を深い憐憫の気持ちで同情している。カトリックもプロテスタントも、貧しい労働者という点で一致団結できる共通点がある、という論理でストライキをめぐる物語は展開するのだが、つきつめて考えれば、貧しい労働者も金持ちの雇用者も同じ人間であり、金持ちなりに悩みはあるのだ、というレイニー夫人の第2幕冒頭での鋭い指摘は、階級闘争の次元を超越する深みを持っている。

ダブリンのスラム街を描いた同時代作家のショーン・オケイシー (Sean O'Casey, 1880-1964) のリアリズム演劇の先駆者として、このレイニー夫人をジュノーになぞらえる批評があるのも頷ける。劇の冒頭場面において労働者のストライキをめぐる会話が交わされるのも『ジュノーと孔雀』 (*Juno and the Paycock*, 1924) によく似ているし、また、終幕でノラが流れ弾にあたって非業の死を遂げる最期は、これまたオケイシーの『鋤と星』 (*The Plough and the Stars*, 1926) のベシー・バージェスの死を彷彿とさせる。(ノラがマイケルを救おうとしたのに対し、ベシーはノラの身代わりになってしまったのだが。)

思えば、初演からすでに90年が過ぎているのに、北アイルランドを取り巻く環境はこの『混信婚』の描く1911年から本質的にはほとんど変化していない事実には驚かされる。異なる宗派間の婚姻はこんにちでもアイルランド社会に様々な軋轢を生み出しており、宗教上の信念が政治上の信念とが重なり合う北アイルランドの場合にはいっそう深刻な事態となる。

混信婚のテーマは、演劇作品ではウィルソン・ジョン・ヘア (Wilson John Haire, 1932-) の『二つの影のなかで』 (*Within Two Shadows*, 1972) や『ダイヤモンドの輝き』 (*Bloom of the Diamond Stone*, 1973), グレアム・リード (Graham Reid, 1945-) の『追想』 (*Remembrance*, 1984), 小説ではマクラヴァティ (Bernard MacLaverty, 1942-) の『キャル』 (*Cal*), リンガード (Joan Lingard, 1932-) の『ふたりの世界』 (邦題) 5部作などの主題や設定に取り上げられ、現実には1990年においてベルファーストでの混信婚は2, 3割を占めるという。

戯曲のなかで、ヒューが結婚の承諾を父親に求めるのをストライキが無事に終結したあとに延ばそうとしたのは、事情を斟酌すれば妥当な配慮ではあるだろうが、そこにはジョンを政治的道具として利用する姑息な意図がまったくなかったとはやはりいえないだろう。ジョンにしても、なんとか顔を合わせながら、ノラの人格的長所をま

まったく考慮に入れず、ただカトリックであるがゆえに結婚に反対する姿勢を貫いているのは、人間的度量の狭さを示している。第4幕が示すように、結局ジョンはストライキ支援演説は行なわず、身内の恥をさらけ出すことでかえって両派の反目を招いて、レイニー家の前に暴徒が結集したようだ。信じるところを最後まで押し通すことによってジョンにもたらされたのは、息子の婚約者の死と息子たちの離反にすぎなかった。つまりこの作品では、ユニオニズムに固執する男の悲劇が、どちらかといえば否定的観点から描かれていることは確認しておきたい。なお、この芝居はわが国でも大正末期に翻訳が刊行されている⁶⁾。

②『寛大な恋人』(The Magnanimous Lover) 1幕

北アイルランドのドナレイ (Donaghreagh) 村の靴屋ウィリアム・キャザー (William Cather) の田舎家の台所兼居間。雑貨商サミュエル・ハインド (Samuel Hinde) が大事な用件だとジェイン (Jane)・キャザーを訪ねてくる。戸外で小屋をつくっていた夫のウィリアムを呼び、サミュエルの話を聞くと、彼の息子ヘンリー (Henry) が英国から10年振りに里帰りしており、近くに待たせているという。姿を現したヘンリーの話によれば、彼とウィリアム家の一人娘マギー (Maggie) はかつて深い男女の仲になり、赤ん坊が生まれたが、彼はマギーを捨てて英国へ逃げた過去がある。いまでは彼はリヴァプールに商店を構え、2人の従業員と軽トラック1台を持つまでに出世し、イングランド人牧師の娘との縁談話も持ち上がっていたが、今朝〈神のお告げ〉を聞いて、急遽、マギーと結婚するために戻ってきたのだという。母親ジェインは喜ぶが、ウィリアムは娘の心次第と答える。やがてマギーが帰宅し、かつての恋人との突然の再会に驚愕するが、捨てられた恥辱と憤怒が蘇り、10年前に母とともに土下座までして結婚してくれるように頼んだのに、なにを今頃になって、と怒りは収まらず、みんなから未婚の母として10年もの間侮蔑され、子どもも私生児としてからかわれてきた苦しみは忘れられない、と訴える。ウィリアムの気配りで、親たち3人は席をはずし、二人だけの話し合いの場が持たれるが、店が多忙なヘンリーは今夜すぐにトンボ帰りするが、1か月後に挙式したい、子どもは将来牧師になる教育を受けさせると勝手な計画を一方的に伝え、そこにはマギーへの愛情も謝罪の気持ちのかけらもなく、ただ自らの犯した罪の償い、自己の魂の救済の意図しか感じられない。しかも、ヘンリーの考えでは、そもそも淫らな肉体で男を誘惑するのが女であり、たとえ正式に結婚することでマギーの世間的な汚名がそそがれ、彼女の魂が救われたからといって、決して女は男以上に立派な存在にはならない、と断言して憚らない。真意を知ったマギーは親たちを呼び戻し、ヘンリーとの結婚の意思は毛頭ない、とはっきり断る。しかし、私生児を抱えた娘の母親という不名誉を終わらせたいと願うジェインは、子どもにはやはり父親が必要、とマギーに翻意を促す。ヘンリーも何度か結婚するように頼みこむが、その動機に自己本位で偽善的な性格を見抜いているマギーはやはり承諾しない。諦めたヘンリーとサミュエルは去っていく。せっかくの機会を逃した、と母親からなじられたマギーは、自分は牧師のもとで挙式しなかっただけで、子どもをもうけたことは母さんと同じ、いや男の子を生んだだけ自分の方が偉い、と言いつつ返す。結婚を拒否したマギーの決断をウィリアムは評価してまた庭仕事に戻り、マギーは寝室へ、残されたジェインは炉辺で涙を流す。

この作品も大正末期に翻訳が刊行されており、わが国でよく知られているアーヴィ

ン作品の一つと思われる⁷⁾。身籠もった恋人を捨てて逃げた薄情男が、10年後にこのこ舞い戻ってきて愛情もないのに結婚を迫る、というプロットは、「寛大な恋人」という反語的な標題とともに、明確な主張が込められてる。情事の責任の所在はそもそもどこにあるのか、主体はいったい誰なのか、呆れて物が言えないほど、ヘンリーの自己中心的な考え方や台詞は反発を呼ぶであろう。この一幕劇には、とにかく誘惑した女の方が悪いとする男性至上主義が露わに描かれている。(残念ながら、男の子を生んだだけ立派、と売り言葉に買い言葉であっても、反論するマギーも、その男性優先の偏見から完全には脱していないのだが。)このヘンリー青年と同じように無責任でだらしない独善的な夫ヘンリーが家庭から追放されるのが、次に見る『ジェイン・クレッグ』である。

③『ジェイン・クレッグ』(Jane Clegg) 3幕

初演は1913年4月21日、ホーニマン劇団による、英国マンチェスターのゲイアティ劇場。引き続き5月19日にロンドンのロイヤル・コート劇場でも同劇団によって上演された。

第1幕。夜9時近く、クレッグ家の32歳の主婦ジェインが縫い物をしながら、義母のクレッグ夫人、2人の子どもたち(10歳のジョニーと8歳のジェニー)とともにこの家の主ヘンリーの遅い帰宅を待っている。ヘンリーは勤務が不規則な外回りの営業の外交員(traveller)らしい。子どもたちは男女逆の役割分担でままごと遊びをし、妹ジェニーは短気ですぐに積み木を壊す。母親はもう寝るように注意するが、ジェニーは言うことをきかず、兄を押し倒す。その様子に義母は、ヘンリーの子どものころそっくりだ、と言い、二人に小銭をやって寝かせる。亭主の行動をつねに監視しておくのは妻の責任だと言う義母に、結婚生活12年になるジェインは、6年前に夫の浮気が発覚したときには、こどもたちもまだ幼く、離婚すれば経済的に養育できなかったから我慢した、女性関係は結婚前に溯るもので、知っていたら結婚しなかっただろう、と打ち明ける。彼女はいまでは、亡くなった叔父の遺産700ポンドを相続し、二人の子どもの将来資金として手つかずのまま貯蓄している。浮気は男の甲斐性として目をつむるべき、という義母に、夫婦はお互いに平等に負担し合うべき、とジェニーは譲らない。やがてヘンリーが帰宅し、留守中に届けられた1通の封書に自分が受取人名義の小切手が同封されているのを見て驚く。どうやら取引先の会社が誤って作成・送付したものらしい。それを財布にしまい、職場の過重労働の不満を述べながら夜食をとり、遺産の一部でも自分に貸してくれたら3倍にして返すうまい話がある、と語るが、具体的な説明もなく、浮気問題で騙されて懲りているジェインは取り合わない。義母を就寝にジェインが送ろうとすると、マンス(Munce)という男が商用で訪ねてくる。(二人の女性は彼と挨拶だけ交わして就寝。)マンスは競馬の馬券屋(bookie)で、ヘンリーに用立てた25ポンドの請求に来たのだが、ヘンリーは無いものは返せない、と返答。昼間一緒にいるところを偶然彼が目撃した女(tart)に使ったんだな、と訊かれ、キティという名のその愛人を(妊娠検査に)病院に今朝連れて行った、妻とは別れて彼女とカナダに逃げたい、とヘンリーは白状する。夫であり世帯主でありながら、妻の財産になんの手出しも出来ないと言ってマンスは大笑い

するが、木曜日までに払わなければ浮気の件をジェインに、賭博の借金の件を雇用主にばらす、女房にはキスのひとつでもして優しくしてやれば素直になる、と脅迫・懐柔して去って行く。残されたヘンリーは財布から例の誤送付の小切手を取り出して見つめ、もとに戻して、部屋から出て行く。

第2幕。2日後。夕食の準備をしてジェインが待っていると、娘ジェニーが競争して飛び込んでくる。遅れて義母とジョニーも帰宅。父親が戻るまでの間、ジョニーは『蒸気機関の歴史』の本を読んで聞かせたがるが、ジェニーは本物の物語の方がいいと言う。ノックがあり、次に現れたのはヘンリーの職場の同僚モリソン(Mr Morrison)で、ヘンリーが今日出勤しなかったので、所長(governor)から調査を依頼されたとのこと。ジェニーは子どもたちに夕食を急がせ、残した食事をベッドに持って行かせる。お休み前の挨拶がひとしきり続き、ようやく子どもたちがいなくなると、ジェニーはモリソンに詳しい説明を求める。モリソン曰く、支払い督促を出した会社から昨夜電話があり、ヘンリー宛てに140ポンドの小切手を送付済みとの連絡を受けたが、彼からはこの数日なんの説明もなく、今日は無断欠勤した、とのこと。横領の嫌疑をかけられていることを察した義母は、息子はそんなことはしない、と反論。会社の全職員は保険に加入しているものの、横領者が起訴され有罪判決を受けて初めて保険会社から保険金がおりの制度になっていること、今回の不祥事を所長はまだ知らず、出納係の自分だけが把握していることをモリソンが伝えると、夫の過失であれば自分が弁済するので、他言はなさらないで下さい、とジェニーは申し出る。やがて当のヘンリーが帰宅。モリソンの姿を見て驚くが、平静を装う。今日は外回りが忙しくて食事もしていない、小切手を入れた鞆は駅の手荷物預り所に預けたままだが、明朝受取りに行くから大丈夫だ、と答えるヘンリーに、あなたは鞆なんか持って出かけなかったわ、とジェインは冷たく言い放つ。観念したヘンリーは小切手は金に換えた、と白状。所長に事態を報告せねば、と気色ばむモリソンに、ジェインは、金は必ず弁済するし、夫は依願退職、一家でカナダかどこかに移住する、子どもの将来もあるから所長には内密にしてくれるようにと懇願する。モリソンはこれを了解し、明晩金を受けとりにくる約束をして立ち去る。不機嫌に夕食をとるヘンリーに、ジェインが金の使途を詰問すると、所長が破産業者の不良債権回収を営業マンである自分に押しつけ、競馬で穴埋めを計ったが失敗した、と彼は不承不承に語る。なぜすぐに打ち明けてくれなかった、というジェインの問いには、彼女の遺産を当てにしていたのとプライドのせい、と答える。食事の後片付けをしようとする夫を拒み、3人は就寝に向かう。俺は悪い人間じゃなく弱いんだ、という夫に、あなたのことが信頼できない、以前の浮気のときもあなたはたしかに約束した、とジェインは言って先に階段を上り、ヘンリーが後に続く。

第3幕。翌晩。義母とジェインが炉端、ヘンリーは二階で子どもたちを寝かしつけている模様。貸倒れを押しつけられた息子にクレグ夫人は同情し、悩み事のある者はうなされて寝言で漏らすもの、と言うと、ヘンリーは寝言でもなにも知らせない、とジェイン。降りてきたヘンリーとこれから先の相談が始まる。知人のいないカナダ行きを高齢の義母は不安がるが、突然退職すれば不審に思われ、人の口に戸は立てられないからやがて真相は発覚、そうなれば子どもたちの将来が心配。だからこそ、誰にも知られない異国に行くのだとジェイン。やがてモリソンが来訪。ところがモリソンは昨夜の約束を守らず、今回の事情は残らず所長に報告を済ませた、隠匿しておく自分の身にもあらぬ嫌疑が及びかねないからだ、と切り出す。所長は当初激怒して警察沙汰にしようとしたが、弁済の話を聞くと納得したらしい。不良債権を押しつけた所長にこそ責任がある、と義母が追及すると、この一年ヘンリーは一件も不良債権など担当しておらず、過去の不良債権も3分の2は所長が売り叩いた、とモリソンは反論。ジェインはこれを知って驚き、夫に釈明を求める。しかしヘンリーがかたくなに返事を拒絶するので、ジェインも弁済の申し出を撤回し、モリソンは逮捕状の即時請求を示唆する。ついにヘンリーは、不良債権云々は嘘っぱちで賭博に使った、と白状し、牢獄送りは嫌だ、と哀願す

る。そのとき、ノックの音が聞こえ、応対に出たヘンリーが閉めたドアをマンスがこじあけて登場。彼もまた例の競馬の25ポンドの借金の返済を求めに来た。モリソンの手前、明朝出直すようにヘンリーは頼むが、彼はもちろん応じない。ジェインはひとまず、準備した弁済金をモリソンに紙幣で渡し、領収書を書かせ、彼は退去。義母も就寝。一方、ジェインはマンスに対しては、借金を支払う意思はない、なぜなら横領金を賭博金返済に当てたという夫の説明自体が嘘であり、もはや万事に信用がおけないからだ、と答える。横領金の使途には口をつぐみ、手元に金はないの一点張りのヘンリーに業を煮やしたマンスは、ついに情婦 (fancy woman) の存在を暴露し、二人は取っ組み合いになる。逃げようとするマンスにジェインは一転して、借金の代理弁済を申し出る。ただし、情婦の件を詳しく教えるという交換条件で。カナダへの逃避行計画をはじめ、知っている情報をすべてマンスは話し、借用証書 (IOU)こそ貰えなかったが、明朝11時に返済の約束を取りつけて帰る。ヘンリーは、自分よりできた妻を貰ったのが間違いのもとで、自分より劣ってはいるが可愛くて馬が合う女という方が幸せになれる、と身勝手な弁明をする。横領金はカナダ渡航切符購入に使った以外は手元にたくさん残っているが、出産(または中絶か)の費用などに充てる必要があるの、金はないと嘘をついていたらしい。しかもカナダ出発は明日であり、彼が今夜の逮捕を恐れたのはそのせいだった。愛のない不誠実な男とこの先暮らしても仕方ないからと、愛人との逃避行をジェインは黙認し、事情を知ったうえでなおこの家に泊めるのは罪だから、と今夜のうちの出発を夫に促す。義母の今後の世話保証するものの、寝ている子どもたちの最後の見納めも許さず、最後の抱擁やキスも拒んで、夫に背を向けたまま、別れの言葉も無視して、ヘンリーが出て行くのを待つ。夫が去った後、しばらく炎を眺め、明かりを落として彼女は二階に上がる。

初演がマンチェスター、そしてロンドン再演であることが示すように、この芝居は舞台がアイルランドではなく、イングランドに設定されている。この作品では、経済的自立が女性にとっていかに大事であるかが証明されており、夫婦財産は別会計と割り切り、遺産全額を子どもの学資として貯蓄に回すジェインの家計運営の姿勢は堅実そのものである。彼女がもし夫の言いなりになって遺産を買い取っていたならば、この劇の結末以上に泥沼の事態を招いていただろう。

不良債権の題材は、著者アーヴィンが若くして保険会社に勤務したときの経験がいかにされているのだろう。自己保身に専念し約束を反古にした同僚モリソンの姿は、オケイシーの『ジュノーと孔雀』の教師ベンサムの変節を想起させる。クレッグ (Clegg) という姓は、普通名詞では昆虫の「アブ」 (horsefly, gadfly) を意味し、あちこち忙しく巡回する外交員の職業と、二度も浮気を重ねるなど、花から花へと移り歩く多情なヘンリーを象徴するものだろう。こうしたヘンリーの性格形成が、母親であるクレッグ夫人の溺愛や〈浮気は男の甲斐性〉といった古典的偏見に影響を受けたと思われるのも一つの問題点になるだろう。

④『批評家たち』(The Critics) 1幕

副題として「アビー劇場での新作戯曲——メディアへのささやかな教訓」がつけられている。

舞台はアイルランドはダブリンのアビー劇場のロビー。新作戯曲初演の夜で、終幕が上演中。ベルファーストのジャーナリスト、バーバリー (Mr. Barbaery) がかなり遅れて到着し、劇場案内人 (Attendant) と会話を交わす。ふだん彼はベルファースト市 (City Corporation) の議事報告を執筆しているが、劇評担当者が急病のため、代理で派遣されたいらしい。劇場でアルコール飲料を扱っていないことを怒り、外国演劇よりも歌と踊りの大衆演劇、あるいは象やジャグラーの登場するミュージック・ホールに衣替えすれば大当たり間違いなし、この提案をイエイツにしてみよう、と持論を展開。新聞社においてはまず劇評から出発し、才能があれば論説委員 (leader-writer) に昇格、そこでさらに活躍してサッカーの試合や検死記事が書けるようになるのが出世コースであり、いまさら下っぱ仕事の劇評など恥ずかしい限りだが、嫌とは言えないお人好しだから引き受けたという。上演中の芝居が〈悲劇〉と聞くや、犬が車に轢かれるような悲劇は日常茶飯事であり、金を払ってわざわざ暗い気持ちになりたくない、と批判し、客席に足を入れる気配がっこうにない。

やがて劇場から劇評家のクアックス (Mr. Quacks) が憤然と飛び出してきて、(アーヴィン自身の『寛大な恋人』やショーの『ブランコ・ポスネット (の登場)』(1909)、シングの『(西の国の) 伊達男』(1907)以上にひどい芝居だと憤慨する。そうしたコメントをバーバリーは必死に手帳にメモし、記事の見出しを考える。劇場からはさらに二人の劇評家——クオーツ (Mr. Quartz) とポーローニー (Mr. Bawlawney) ——が出てきて、こんな芝居は今夜限りで打ち切りにすべきだ、と主張する。芝居の筋をバーバリーが尋ねると、まず舞台に亡霊 (ghost) が登場したとクオーツは言うが、亡霊ではなくレプラコーン (leprechaun) で、妖精好きのイエイツの影響だ、とポーローニー。ひどい言葉が使われているこの芝居は自警団 (Vigilance Committee) に通報して取り締まって貰うべきだとクオーツは言い、ポーローニーは、妻に暴力を振るうと噂の劇場支配人ロビンソンがきつと台本に手を入れて10分おきに'bloody'を無理やりに挿入しているせいで、イエイツとロビンソンが共同執筆したあとで、仕上げにグレゴリー女史が得意のキルタータン方言の台詞を付け加えたのだ、と断言する。クオーツは劇中人物の台詞として書き留めておいた一節——「おお、このうえなく邪悪な速さよ、かくも機敏に近親相姦のシーツへと急行するとは」——を引用し、兄殺しの弟が義姉と結婚する不謹慎な物語で、発狂した娘が溺死し、墓場が設営された舞台では墓堀人夫たちが頭蓋骨を掘り出している不気味な芝居だと二人して説明する。アイルランドでは亡妻の姉妹 (義姉妹) との婚姻は合法だが、亡夫の兄弟との婚姻は認められていないし、主人公の台詞「情欲の血は鎮まって」や「油染みた床の悪臭を放つ汗」は、実の母親に対して使うまっとうな言葉ではない、と批判する。しかしながら客席からは拍手喝采が聞こえてくる。クアックスは、戯曲の検閲機関(長老派教会総会議長、ダブリン枢機卿、アイルランド教会首席主教、ロンドンデリー侯爵、オレンジ会首領などで構成)の設立を主張する。バーバリーはこれまでのメモをもとに記事原稿の推敲を求めるが、観てもいない芝居について論評する姿勢を批判されると、新聞記事などは暇潰しに読むものであり、誰も〈事実〉などに興味はない、記者の仕事は読者にクロロホルム麻酔をかけることだ、と居直る。ところが、肝心の芝居のタイトルや作者をまだ知らなかったバーバリーは、それがシェイクスピアの『ハムレットの悲劇』と聞いて、果たしてこれはアイルランドの芝居か否か、不審がる。クオーツは作者はベルファースト出身と推測し、ご当地出身のバーバリーは、いや、「マーフィー」のゲール (アイルランド) 語表記だろう、と推量する。芝居が終り、観客は総立ちで盛大な拍手を送っているが、忌まわしい芝居であることは明朝の自分の劇評でみなが認識するだろう、とバーバリーは言い、シェイクスピアとやらは(アイルランド南部の) コーク出身だろうという彼

の想像に、ロビンソンの生れ故郷だから多分そうだろう、とポーローニーも応じて、劇場を後にする。

アーヴィンはこの芝居に次のような挑戦的な注をつけている——「この芝居の対話の多くをダブリンの劇評家たちに負っていることを感謝したい。私は『寛大な恋人』初演翌日のダブリンの新聞に掲載された批評文から台詞の多くを剽窃し、変更を一切加えませんでした。」——すでに見たように『寛大な恋人』初演は1912年10月17日、本作初演が1913年11月20日であるから、実にまる1年もの間、アーヴィンの復讐心は収まらず、満を持して想を暖めたうえでの劇評家反撃の戯曲であった。ただ、自作『寛大な恋人』への酷評の憤懣だけでなく、アビー劇場主宰者のイエイツやグレゴリー夫人、さらにはこの芝居を演出したレノックス・ロビンソンへの揶揄に満ちた言及が多いことが目をひくだろう。そのからかいの露骨さは、彼らを虚仮にしている3人の劇評家たちの道徳的偽善や無知を痛烈に風刺する一方で、もしかするとアーヴィン自身も陰に隠れてその罵倒に賛同してゐるのではないかと疑いたくなるほどである。こんな悪口を言っていましたよ、と告げ口しつつ、密かに彼もまた溜飲を下げていたのでは、という憶測は邪推であろうか。

いずれにせよ、この作品がきわめて辛辣な、劇評家への風刺であることは一目瞭然であろう。シェイクスピアや『ハムレット』を知らないプロの劇評家がこの世にいるとは思えないが、粗筋だけをあげつらえば、たしかに『ハムレット』は不道徳な要素に富む陰惨な作品であり、道徳律だけを基準に劇を批評する、無知な輩への諧謔は果たされている。

⑤『オレンジマン』(1幕)

初演は時期不詳だが、イングランド南東部のケント州都メイドストーン (Maidstone) のパレス劇場 (Palace Theatre) で、その後イングランドの地方公演を経て、1914年3月21日のダブリンのアビー劇場 (Abbey Theatre) 公演がアイルランドでの初演である。

1912年7月11日午後のベルファースト郊外バリーマキャレット [作家の出生地] の労働者階級の一家マクラーク家の台所。プロテスタントにとってもっとも重要な祝日を明日に控えながら、この家の主ジョン・マクラーク (John M'Clurg) はリューマチのせいで歩行がかなわず、30年来続けてきた行進参加が出来そうもないのを嘆いている。しかし、具合を見に訪れた友人アンディ・ハヴロン (Andy Haveron) には、たとえ自分が参加できなくとも息子のトム (Tom) が立派に代役を務めてくれる、と自慢する。オレンジ会での演説にスミスというイングランド人が来るという記事を読んだジョンは、アンディに詳しいことを訊くが、7月12日が彼の誕生日であることくらいしか彼も知らな

い。ジョンは妻ジェシー (Jessie) に「ラムベガー」⁹⁾と呼ばれる大太鼓を持ってこようと言う。太鼓をうっかり落とす音が聞こえ、やがて妻が太鼓を運んでくる。ジョンは肩章も持ってこいと命じる。アンディに太鼓の紐をきつく縛らせたあと、オレンジマンの愛唱歌を歌いながら太鼓をたたく。肩章を探しあぐねている妻に、食器棚のなかに聖書と一緒に置いてある、とジョンは教え、ようやく妻は肩章を持ってこる。やがて、一人息子トムが帰宅。ジョンはオレンジ会のアーチに2シリングの寄付をした自慢話を切り出す。息子はすこしも関心がなく、妻もお金の無駄使いだと批判。ジョンはまた、紅茶をうっかり大事な肩章にこぼすが、誰も気に留めないのに腹を立てる。妻は濡れた肩章をはずして、太鼓にかけて干す。食卓を片付けたあと、ジョンは息子に両腕を伸ばさせ、筋肉を触って息子の力強さを確かめ、明日の行進に父親代理で参加するように厳かに指示する。この行事は先祖代々受け継がれるもの、とアンディも説く。しかし、トムはそれを断る。この任務を恥じる者はこれまでいなかったと、強打のあまり太鼓に付着した自分の血痕をジョンは指し示す。カトリックの悪口を父親が口走るのを耳にしたトムはうんざりして外出しようとするが、母親になだめられ、思いとどまる。ジョンはこんどは冷静さを取り戻して、諄々と息子を説得するが、やはりトムの気持ちが変わらないのを見て、勘当だと激昂する。トムは、自分はオレンジマンではないし、今後もなるつもりはない、と宣言、これに怒ったジョンはトムを床に突き落とす。トムは立ち上がって、太鼓を蹴り飛ばし、足で皮を突き破る。ジョンは愕然とする。妻は破れ太鼓を抱えて戸口まで運び、「空気が抜けてしまっても、さっきと同じように重いわねえ」と漏らす。

プロテスタントでオレンジマンの頑固な父親と、それに同調せず、反抗的態度を示す母と息子。張り詰めて威勢よく打ち鳴らされていたものの、いまや無用の長物と化した〈破れ太鼓〉は、老いた父親ジョンとユニオニズムの象徴であろう。この劇の書かれた時代背景が、アイルランド自治法案に反対するユニオニストたちの動きが活発化していた時期であることを思えば、彼らの精神的支柱の一つであるラムベガーが破損される行為を舞台上で示すのは、かなりの勇気を要するはずであり、初演の場所が北アイルランドではなく、イングランド南部の地方都市である理由が頷ける。

自分の家業や仕事を息子に託すが、息子はそれを受け入れない、というのは世間ではざらにある話に違いないが、妻子から疎んじられるこの父親の惨めさは際立っている。伝記から判断すれば、作者アーヴィンの共感、母と息子側にあるものと想像されるが、こうまで無残に夢を砕かれる父親の姿は、かえって観客や読者の哀感や同情を誘うだろう。

⑥『ジョン・ファーガソン』(John Ferguson) 4幕

祖母マーガレットへの献辞が添えられたこの作品は、第1次大戦中の1915年11月30日、ダブリンのアビー劇場で初演されたもので、演出はアーヴィン自身が担当、つまり彼がアビー劇場の支配人兼任直後に上演したことから、彼の代表作・自信作であることがわかる。

第1幕。1880年代の晩夏の北アイルランド・ダウン州 (Co.Down) のファーガソン家の農家の台所。板付きはこの夫婦で、夫人のセアラ (Sarah) は靴下を繕い、夫ジョンは脚に膝掛けをのせて大判の聖書を読んでいる。旧約ダビデの『詩篇』30章からの引用「悲しみは一晚続くかもしれないが、朝には喜びが訪れる⁹⁾」を読んで聞かせると、セアラは同感する。先祖伝来の農地はいまや抵当に入っていて、ジョンは病気で農作業が出来ず、息子で19歳のアンドリュー (Andrew) も農作業には不向き。農夫で粉屋の悪党ヘンリー・ウィザロウ (Henry Witherow) からは借金の返済を迫られているが、頼みの綱とする [アンドリューの実父 (?) で同名の] 兄弟のアンドリューからは援助金も手紙も来ない。娘ハナ (Hannah) が帰宅。今日は郵便配達人サム (Sam Mawhinney) の配達が遅れている、と告げる。体調を気遣う娘の問いかけに、皆のように野良仕事ができぬ我が身をジョンは嘆くが、これも神の意思であり、藪の小蠅にもかならずなにかの目的や意味があるのだ、それが分からない無知こそ罪なのだ、とハナに諭す。食料品雑貨屋で35歳くらいのジェイムズ・シーザー (James Caesar) が近づいてくるのが見える。この男の一家もヘンリーからひどい仕打ちを受けており、彼は復讐を公言しているが、度胸がなくて実行できないでいる。ハナに好意を寄せているが、彼女はそうした優柔不断な性格を毛嫌いしている。シーザーは入ってくると、ヘンリーをいつか絞め殺してやる、と言うが、実際にはその力も勇気もなく、口先だけの不甲斐ない男であることを認める。ジョンは、悪人のヘンリーの生命でさえ神の生命であるから、彼を殺すことは神を襲うことになる、と戒める。シーザーは話したいことがあるとハナを誘い、セアラも促すが、彼女は拒否。そこへいきなり、話題のヘンリーが登場。彼は巨漢の体軀でいかにも屈強な男。別嬪になったな、とハナに色目を使うのでシーザーが気色ばむが、ちょうど郵便屋サムが通り過ぎる。呼び止めて確認するが、期待していたアンドリューからの手紙はやはりない。お気の毒だが農地は抵当として貰おう、と偽善的に言うヘンリーにシーザーが口答えし、ヘンリーは彼を乱暴に揺すぶる。ハナは気丈にもヘンリーの顔を殴り、期限まではお前の物ではないから出て行って、と叫ぶと同時に、猶予期限の延長をヘンリーに懇願もする。半ば諦念のジョンは、きつとアンドリューも金の工面がつかず手紙も書けないのだから、抵当流れ処分 (foreclose) を弁護士と進めるように促す。シーザーは、もしハナが言うことを聞いて (自分と結婚して) くれるなら、全財産を投げうってでも抵当を買戻す、と申し出る。ハナの決断を知りたがるヘンリーに、彼女は威勢のいい啖呵を切り、さすがのヘンリーもたじたじとなって退散する。立ち去り際に〈ぎっちょの〉ジョン¹⁰⁾・マグラス (“Clutie” John Magrath) を突き飛ばす。シーザーの求婚に、結婚は相思相愛が肝心であり、娘の意に染まぬことを強制するよりは抵当流れがよい、最善と思うことをしなさい、とジョンは娘に命じる。ハナは老いた父をしばらく見つめ、シーザーの求婚を受け入れる、と告げる。30歳くらいの〈ぎっちょの〉ジョンが笛を吹きながら登場。この男、施設に収容されるほどは気が触れておらず、かといって健常者と同様な扱いを受けるほどは賢くない、労働なら誰でもするが笛吹きは少ない、と自ら公言する曲者である。シーザーは厄介払いしようとするが、ジョンはミルクとパンを彼に与える。ジョンはお礼に十八番の〈ウィリー・ライリーとコリーン・ボーン (美少女)〉を演奏し、ヘンリー家とは大違いの待遇、とお愛想を言う。野良仕事を終え疲れたアンドリューが帰宅。シーザーは早速彼に、自分とハナが婚約したことを伝えると、アンドリューは啞然とする。二人きりで話を、とシーザーはハナを誘って外出。アンドリューはハナの決断が本当に自由意思によるものか尋ね、農地を手放さずに済むのは嬉しいが、農地や家族を守るために自己を犠牲にしたのでは、と案じる。一方セアラは、優しく金に不自由のない家庭が一番、と娘の結婚を歓迎する。やがてドアが開き、ハナが取り乱して戻って来て泣き出す。ずっと気が張っていたから、とセアラは宥めるが、ジョンの真摯な問いかけに、シーザーから別れのキスをされそうになったとき死ぬほど嫌だった、と打ち明ける。シーザーは酒も賭け事もしない真面目な

男で、求婚を心待ちにしている娘が何人もいるのに、セアラは叱る。農地譲渡の申し出をヘンリーに伝えるように、ジョンがアンドリューに命じると、ハナは一転して、やはりシーザーと結婚すると翻意するが、ジョンの意思は変わらない。怒ったセアラは、伝言役をハナに押しつけ、ハナも了解する。留守中に、この間の事情を知らぬシーザーが来たら、心変わりを代わりに伝えるように頼んで、彼女は身支度をして出かける。セアラは夕食の配膳にかかり、ランプに明りがつけられ、ジョンは息子から聖書を受け取る。

第2幕。1時間以上が経過し、戸外はすっかり暗い。夫婦と息子は夕食中、〈ぎっちょの〉ジョンもあてがわれた食事を炉端で取っている。ハナの帰りが遅いのをセアラは心配。ベルファーストでリネン工場を経営する父親を持つ友人に手紙を書いて仕事を斡旋してもらい、自分とハナとが働いて両親の面倒を見るから一家で上京しよう、とアンドリューはジョンに提案し、山間の夜霧よりもロッホ湖を渡る海風が健康にいいかも知れない、とジョンも応じる。ノックがあり、現れたのはシーザー。自信溢れる態度で、婚礼準備のご相談に、と切り出し、〈母さん〉〈お母さん〉どちらで呼びましょうかと、セアラに尋ねて困惑させ、アンドリューには牧師職か自営業への経済的援助を申し出る。みかねたジョンはついに、ハナの急な心変わりを打ち明ける。冗談でないと思ったシーザーは、すでに婚約の件は近所中に吹聴してしまい、ひどい仕打ちだと憤る。ハナへの自分の思慕は長年のもので、たとえ彼女が愛してくれなくても構わない、農場を守るために婚約を了解したことなど最初から分かっていた、と泣き出す始末。やがて気を取り直し、無礼な言葉を詫び、ハナの戻る前に立ち去ろうとする。〈ぎっちょの〉ジョンが聞き耳を立て、外へ飛び出す。またしてもハナが取り乱して帰宅。ジョンはハナにミルクを飲ませ、落ち着かせる。ハナの説明によれば、ヘンリーに農地譲渡の意向を伝えると彼はシーザーを嘲笑い、彼女を家まで送る道すがらにキスを強要、抱きついて彼女を押し倒したのだ、と言う。ハナが凌辱されたと悟ったシーザーは家を飛び出し、ジョンはアンドリューに追跡を命じるが、彼は拒否する。ジョンはしがみついたハナを妻に任せ、母子は二階に上がる。「目には目を」でヘンリーは殺されて当然だ、とアンドリューは主張する。判断は神の御業であり、仕返しをすれば悪い相手と同じことになる、とジョンは論すが、息子の意思は変わらない。ジョンは一人でシーザーの捜索に出かける決断をし、ハナのそばにいてあげて、と降りてきた妻の依頼も断って、身支度を整えて夜寒の戸外へ出て行く。極悪人ヘンリーを殺す権利がシーザーにはある、とアンドリューは母親にも繰り返す。母親は二階に戻り、残されたアンドリューに〈ぎっちょの〉ジョンが話しかける。父親ジョンはとても寛容さ (forgiveness) のある人だ、それにひきかえ、ヘンリーはひどい奴だ、シーザーは意気地なしで卑怯者だ、目の前に背を向けた相手がいれば殺せたかもしれないが、銃を取りにうちへ戻るまでに怖じ気づいて、いまごろはベッドでぬくぬくと寝ているさ、そうとも知らぬジョンは寒い夜道を彼を探し回り、一方ヘンリーは (以前、マーサという娘を孕ませたように) ハナを手籠にした自慢話を酒場で吹聴しているだろう、もっとも自分はすこし気が触れているから、なにを喋っているのかわからないがね、とアンドリューを挑発する。母親が降りてきて、ジョンを探しに行くように頼むと、アンドリューは引き受ける。〈ぎっちょの〉ジョンはなおも、丘の上のヘンリーの家の明かりが点っていて平穩無事な様子であること、今宵は月が出ていない闇夜であることをアンドリューに暗示して、引き下がる。一人、明かりを見つめていたアンドリューの胸に怒りが込み上げ、台所から銃を持ち出し、弾丸の装填を確かめ、出て行く。セアラが降りてきて二人の名前を呼ぶが返事はない。彼女は戸外をしばらく見やって、また二階へ戻る。

第3幕。翌朝早朝。朝日が溢れ、銃は元の位置に戻され、変わった気配はない。セアラがやかんをかけていると、ジョンが降りてくる。ジョンは昨夜、ヘンリーの家に向かったがシーザーには会えず、ヘンリーに身の危険を知らせたのだと言う。娘をかどわかされた父親が何も手出しをしないばか

りか、相手の安全を気遣った、と聞いてセアラは呆れるが、ジョンは、〈汝の敵を愛せ〉が神の教えであり、愛することはできなかったが警告したのだ、開闢以来、人間は報復を繰り返してきたが、憎悪と悲痛しか得られなかった、と語る。ジョンはヘンリー宅を辞したその足でシーザーの店に向かったが、彼は不在。付近を探してまた訪ねたが、やはり不在。しばらく待ったが現れないので、諦めて家に引き返し、アンドリューとも出くわさなかった、と語る。牛小屋から呼ばれたアンドリューに、ジョンはシーザーの所在確認を依頼する。農場への未練からシーザーのハナへの求婚を断固拒むことをせず、結果的にシーザーに向こう見ずな行為に走らせかねない事態を招いた責任が自分にあるからだという。シーザーは口先だけの男で殺人などできやしないから大丈夫だ、とアンドリューは答える。ジョンは、人を裁くのは神の御業であり、神は裁きはするが罰は与えない、自分の心を見透かす知恵を下さることが人間にとって辛い罰になるだけだ、と論ず。そこへ当のシーザーが登場し、テーブルに頭を乗せて泣きじゃくる。彼は昨夜、逆上して無我夢中でヘンリーの家まで行ったのだが、殺すための凶器をなんら持ち合わせていないのに気づき、いったん店に引き返して銃を持ち出したが、誰かに目撃されていないかと恐怖が襲い、闇雲に走っているうちに転んで銃を落とし、そのまま恐怖で走り回ってハリエニシダの茂みに隠れて朝まで過ごした、大それたことをしたいという夢はあるのに、その勇気がない自分が恥ずかしい、という。アンドリューはシーザーを軽蔑するが、殺人を犯さなくて安堵した、とジョンは語る。シーザーは、殺意はいまでも抱いているが、実行する勇気がない臆病者だと嘆き、ハナが承諾してくれたときは、将来、治安判事にでも出世できる自信が湧いた、と語ると、アンドリューは嫌気がさして出ていく。セアラは二階のハナを朝食に呼び、シーザーは一部始終をハナに告白して敵をうたなかつことを詫び、結婚してくれないか、ともう一度ハナに申し出るが、ハナはまだ立ち直れていない。〈ぎっちょの〉ジョンが慌てて飛び込んできて、シーザーを見て驚く。心臓を撃たれたヘンリーの死体が今朝発見され、警官たちもいた、と彼は報告する。ジョンやハナはシーザーの犯行だと即座に思い込み、シーザーは自分に嫌疑がかかることを予感して怯え、ハナを巡る三角関係を警官に話さないようにみんなに懇願する。アンドリューが戸外から戻り、ヘンリー殺害のことを聞かされた彼の声はうわずる。彼はシーザーが犯人だとは思わないが、疑われるのは必至だから逃げた方がいい、と勧める。四面楚歌のなか、警官たちと野次馬が近づいてくるのが見え、シーザーは匿ってくれと哀願するが、ジョンは自分自身から隠れることはできない、みずから罰を甘受せねば、と取り合わない。カーナガン巡査部長 (Sergeant Kernaghan) 一行が到着し、シーザーに殺人容疑での逮捕を言い渡し、2名の巡査が手錠をかける。殺意は認めるが実行を否認するシーザーを彼らは連行する。戸外で笛を吹きはじめた〈ぎっちょの〉ジョンをアンドリューは叱りとばし、昨日より寒いねえ、と話しかける彼にジョンは相槌をうつ。

第4幕。2週間後の午後遅く。めっきり衰え、死期の迫ったジョンが、1幕冒頭のように聖書を読んでいる。『サムエル記 下』18章 (29節以下) を音読すると、セアラがハナの帰宅を告げる。ハナは獄中のシーザーの面会に頻繁に出かけ、アンドリューは事件以降、すっかり寡黙になったが、子どもたちが親元から離れた分、夫婦の絆が深まるではないか、とジョン。帰宅したハナはシーザーが依然として犯行を自白していないこと、弁護士マルハーン (Mulhern) もときに懐疑的になるがシーザーの犯行に間違いはなく、情状酌量の余地があると考えていると伝える。殺人に酌量の余地はなく、改悛と赦しのみ、とジョンは答える。絞首刑にならぬよう請願運動が起きているが、たとえ減刑されても、終身刑は「人生を奪うのに、死を与えない」からいっそう酷いとハナ。郵便配達人サムが現れ、アメリカからの手紙を届ける。アンドリューからのもので為替証書が同封されている。神様は遅かった、とハナは毒づき、手紙を読み上げる。裏に書かれた追伸から (投函が) 1日遅れになったために、手紙の到着が遅延したらしいことが分かる。船便の出る日を間違えなければこんな事件はいっ

さい起こらなかつたのに、と涙ぐむハナ。アンドリューが帰宅。郵便の悲劇を知って彼もヒステリックに笑い出す。そしてヘンリーを殺したのは自分だと告白する。ジョンは息子の狂言と思って受け流すが、凶器の銃を示し真面目な息子の様子に、事実だとようやく認識し、愕然とする。アンドリューは、鼠を殺すテリア犬同様にヘンリー殺害を少しも悔いていないが、シーザーに濡れ衣をさせた卑怯な経緯を恥じている、シーザーが来たと思って嘲笑うヘンリーめがけて銃を撃ち、即死を確認に戻ろうかとも考えたが、そのまま誰にも見られず帰り着き、銃をしまい、嫌疑がシーザーにかかっても気にとめなかつた、しかしやがて落ち着かなくなり、自分が犯人だと悟っていながら何も言わないくぎつちよの> ジョンの笛の音を聞いているのが心の慰めだった、と語る。告白を聞き終えたジョンは、アンドリューを一刻も早くアメリカの叔父の元へ逃がそう、今日送られた金はそのためにこそ使うべきだ、と興奮する。シーザーを匿おうとはしなかつた、と息子に言われると、お前は私の息子だ、彼は頭の中で何度も殺人を犯しており、考えただけでも罪だと聖書には書いてある、健康を害し、抵当で苦勞し、娘は凌辱され、お前まで牢獄行きでは耐えられない、と反論する。しかしアンドリューは、身代わりとなって処刑されるシーザーの姿に苛まれるよりも魂の安らぎを得たい、と譲らない。アンドリューの肩を持つハナに、セアラは、そもそも婚約を破棄したお前が諸悪の根源だ、と批判し、たとえ百人を殺していても自分の息子は守る、と逃走を促す。我が身を清らかにするのは本人以外には誰にもできない、まさしく「自分からは隠れられない」とアンドリューは譲らず、ハナとともに自首する覚悟を伝え、両親と最後の抱擁をし、農地の小作人の人選などを託けて去っていく。セアラは後追いするが、やがて戻ってくる。父親にとっても苦しいのは同じ、夫婦でこれまで苦楽を共にしてきたのだからこれからは共に耐えていこう、とジョンは『サムエル記 下』の続きを読む。しかしその声はすすり泣きが変わってとぎれ、セアラは低い呻き声をあげる。

アーヴィンの初期作品、あるいは全作品のなかでも最高傑作と呼ばれるに値する作品であろう。「天道是か非か」といった神の摂理、人間の良心の問題は、アーサー・ミラーの『坩堝』や『みんな我が子』に通じる壮大な主題である。殺されて当然の極悪人を殺してなにが悪い、という発想は『罪と罰』のラスコリーニコフの金貸し老婆殺しの発想でもあるし、巧みに殺人を教唆するくぎつちよの> ジョンは『オセロ』のイーアゴウを彷彿とさせる。状況証拠十分でアリバイなしのシーザーが冤罪に陥る顛末は犯罪事件物として説得力があるし、遅れて届いた郵便の悲劇という設定も見事に生きている。現代の感覚からすると物語の展開がやや緩慢な印象もあるが、演出次第ではスケールの大きな悲劇となる作品だろう。

戯曲の最初と最後に朗読される『サムエル記』のアブサロム (Absalom) の記述は、フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の小説の標題 [*Absalom, Absalom!* (1936)] にも取られたように、ユダヤ王ダヴィデ (David) のお気に入りの第三子アブサロムが、父王を廃して自ら王位に就こうと反乱を起こしたため、エフライム (Ephraim) の森で殺され、ダヴィデ王はその名を叫んでその死を悲しんだというものである。

(IV) まとめ

「彼の作風はIreland 的であるよりもイギリス本土の手堅い写実派作家のそれに近く¹¹⁾」, 「意識的になったというより生まれつきということの方がふさわしいアルスターの劇作家である。…初期の戯曲のなかの最上の作品でも、地方の生活から自然に生まれて来た作品というより、地方の生活を戯曲的に利用して生まれた作品に見える¹²⁾。」

アーヴィンの作風について述べられた上記の論評は、いずれもアーヴィンの北アイルランド作家としての地方色や土着性に疑問を投げ、彼をイギリス演劇の伝統的主流のなかに位置づけようとする解釈である。これはアーヴィンの生涯にわたる作品全般、なかでも中期の商業演劇を念頭におけば妥当な論評であろうが、本論で扱った初期作品の『混信婚』や『寛大な恋人』『オレンジマン』などの宗派对立や信仰をめぐる主題や状況設定を見れば、かならずしも当てはまるとはいえないだろう。とくに『混信婚』と『オレンジマン』は、文体の面でも強烈なベルファースト訛の英語表現がふんだんに使用され、ダブリン訛の英語でスラム生活を描いたオケイシーを連想せずにはいられない。アーヴィンの初期作品は、『ジョン・ファーガソン』を別にすれば、オケイシーほどの悲喜劇の荘重さには欠けるかも知れないが、たとえば後世のベルファースト出身の劇作家サム・トムソン (Sam Thompson, 1916-65) の『橋の向こう』 (*Over The Bridge*, 1960) の先駆となったとされるなど、地元の劇作家にも少なからぬ影響を与えている。

『アイルランド伝記事典』の記述によれば、アーヴィンがアビー劇場の支配人だった「当時は、ナショナリストだったが、数年のうちに強固なユニオニストになった」と、百八十度の政治的転向が1910年代後半になされたとしている。冒頭の略伝でも触れたように、1916年4月の復活祭蜂起がアーヴィンに与えた影響は大きい。カーソンの伝記『エドワード・カーソン卿とアルスター運動』 (*Sir Edward Carson and the Ulster Movement*) はすでに1915年に刊行されているから、すでに蜂起以前にアーヴィンのユニオニズムへの傾斜が始まっていたと見るのが妥当であろう。初期作品ではユニオニストたちの頑迷さが批判的に描かれてきたが、転機を暗示するのはやはり『ジョン・ファーガソン』の暗鬱な世界観・宗教観であろう。

なお、初期6作品のうち3作品 (『混信婚』『オレンジマン』『ジョン・ファーガソン』) において登場人物の頑迷な父親の名前が、作家と同じ〈ジョン〉と命名されていること、女性関係がだらしない男が『寛大な恋人』や『ジェイン・クレッグ』ではいずれも〈ヘンリー〉と名前がつけられていること、幼時に他界した実父の名前ウィリ

アムは『寛大な恋人』のなかの包容力のある父親、また実母セアラの名前は『ジョン・ファーガソン』の妻の名前、世話になった祖母マーガレットは『寛大な恋人』のなかの気丈な娘の名前マギーに用いられるなど、総じて伝記上の実在する人物名と戯曲の登場人物名が一致する場合が多く、このことは単なる偶然というよりも、なにか作家の深層心理と結びついた命名のような気がしてならない。

アビー劇場の支配人を辞職し、第1次大戦に従軍して片足を失ったあとのアーヴィンの中期戯曲作品の極端な作風の変貌とその理由については、続編に稿を委ねたい。

本稿は、平成13年度科学研究費による研究成果であり、また平成13年10月20日静岡大学で開催された日本英文学会中部支部第53回大会での筆者の研究発表に一部基づくものです。当日司会を担当下さり、有益な助言をいただいた名古屋女子大学教授・升田匡彦先生に感謝申し上げます。

使用テキスト

St. John G. Ervine, *Four Irish Plays* (New York: Macmillan, 1914)

St. John G. Ervine, *John Ferguson: A Play in Four Acts* (London: George Allen & Unwin, 1919)

St. John G. Ervine, *Selected Plays of St. John Ervine* (Gerrards Cross, Buckinghamshire: Colin Smythe, 1988)

注

- 1) 名前に新たにSt. を付記したのではなく、St. Johnをミドル・ネームに加えたという解釈をとり、John St. John Greer Ervineと重複表記する書誌もある。Frank L. Kersnowski, *A Bibliography of Modern Irish and Anglo-Irish Literature* (San Antonio, Texas: Trinity University Press, 1976), p.38.なお、母方の姓のGreerの略号G.の有無はテキストによって異なるが、一般的には省略される場合が多いので、論文標題からは外した。
- 2) Peter Kavanagh, *The Story of Abbey Theatre* (Orono, ME: University of Maine at Orono, 1984), A Facsimile Reprint of 1950.
- 3) 3幕のモリソンの台詞。p.103.
- 4) 全国の大学の紀要論文や研究雑誌論文をほぼ網羅していると思われる『英米文学研究要覧』(日外アソシエーツ)の1975年から1999年を扱った4巻においてアーヴィン関連論文は次の1件のみ——広田典夫「セン・ジョン・アーヴィンの『アンソニーとアナ』」(『早稲田商学』309号, 1985年1月, pp.667-83.)。1945年から64年に溯っても、菅原卓「アーヴィンの『戯曲作法』」(『新劇』1巻5号, 1954年8月, pp.80-83.)があるのみ。1965年から74年を扱う『要覧』は刊行されていないので確認できないが、ほぼ半世紀にわたってアーヴィンはわが国では研究の対象とされてこなかった事実が窺える。
- 5) *Selected Plays of St. John Ervine* (Gerrards Cross, Buckinghamshire: Colin Smythe, 1988), pp.7-16.
- 6) 山田松太郎(訳)『雑婚 外二篇』(大阪: 蘭城社, 1924 [大正13]年)。参考までに訳者の序文

の解説を以下に引用する。——『『雑婚』(Mixed Marriage) (千九百十一年) はベルファストに住む一労働者の家庭の悲劇を描いたもので、ベルファストの社会問題の最も好く現はれてゐるものである。愛蘭自由國の建設成つた今日に於ては、愛蘭人の心理も非常に變つて來た事と思ふが、ツイ三四年前迄は、新舊兩教の反目は實に甚だしいものであつて、此の作中に現れてゐるやうな悲劇は到る處で演ぜられたものである。又愛蘭獨立運動の爲めには、愛蘭獨立黨の活動は猛烈なものであつて、目的の爲めには手段を顧みざる様子であつた斯かる社會を背景に、労働者の共通的利害問題たるストライキといふ事件を中心にして、其處に起り來る若き男女の戀愛に絡まる家庭悲劇を描いたものが、此の『雑婚』である。此の作が社会劇として優秀なる事は勿論乍ら、又實に作中の各人物の性格描寫の勝れたる點に於ては、他に比肩するものが少ない。従つて舞臺上に於ても十分に成功し、今日に至る迄十年間餘に渡つて、英米各地一流劇場に於て幾十度となく上演され、多大の名聲を博し來つたものである。』(pp.4-5.)——アイルランド自由國の誕生をもつて新旧兩派の対立が緩和されたとする予断的認識は残念ながら不正確であろう。

- 7) 松村みね子(訳)『愛蘭戯曲集 第一巻』(東京:玄文社出版部, 1922 [大正11]年) (『寛大な戀人』の翻訳を所収)
- 8) Fintan Vallely, *The Companion to Irish Traditional Music* (Cork: Cork University Press, 1999), p.210. 「ラムベッグ・ドラム」は直径3フィート(91cm), 幅2フィート4インチ(70cm), 重さ30ポンド(13.6kg), 音量120デシベルが現行の標準サイズだという。
- 9) 『聖書 新共同訳——旧約聖書統編つき』(日本聖書協会, 1992年)では、「泣きながら夜を過ごす人にも／喜びの歌と共に朝を迎えさせてくださる。」(6節後半)
- 10) 1913年に刊行されたアーヴィンの*Eight O'clock and Other Studies* (Dublin and London: Maunsel and Co.) 所収の'Clutie John' (「ぎっちょのジョン」) という6頁の習作短編では、主人公ジョンは、朝早く通りを歩いて、人々の前夜の落とし物や忘れ物を拾うことで生計を立て、身寄りも遺書もなかったので、蓄えたお金は死後に國家のものとなつて、結局また人々に還元された、という落ちがついている。『ジョン・ファーガソン』のなかのシニカルな「ぎっちょのジョン」は、この素描作品のジョンよりもさらに世間知に長け、道化のもつ深みが付与されていることは、例えば以下の引用から分かるだろう。
シーザー 悪魔に魂を売り払つたという評判だ。
ジョン 何百万もの魂がただで手に入るのに、どうして悪魔が魂を買つたりするもんですか。
(30)
- 11) 齋藤勇監修『英米文学辞典 第三版』(研究社, 1985年), p.398.
- 12) ジョージ・サンプソン(平井正穂 監訳)『ケンブリッジ版イギリス文学史III』(研究社, 1977/8年), p.378.

参考文献

- 阿部孝『英国劇講話』(三省堂, 1929 [昭和4]年), pp.76-9.
- Denis Ireland, 'Red Brick City And Its Dramatist: A Note on St. John Ervine', *Envoy* (Dublin, March 1950), pp.59-67.
- Paula Howard, 'St. John Ervine: A Bibliography of his Published Works', in *Irish Booklore* (August, 1971), pp.203-209.